

I 学校の概要

アクティブ・ラーニング研究推進モデル校事業 坂出市立加茂小学校

◆児童数及び教員数

○児童数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	特別支援	全校
1学級 28名	2学級 29名	2学級 38名	2学級 37名	1学級 39名	1学級 27名	2学級 7名	11学級 205名

○教員数 18名

◆学校の特徴

本校区は坂出市の南東部に位置し、交通の便のよさから10年程前より宅地造成が進められ、住宅地が急激に増えてきている。地域の人々や保護者は本校の教育活動に対して協力的で、健全育成のための様々な取り組みを実施し、児童会活動や地域の体育的活動も盛んである。児童は素直な子が多く、家庭・地域の教育力を得て加茂小学校の児童としてすくすく育っている。

平成29年度は、県教委の研究指定「思考力等の育成モデル校事業」を受け、ものの見方・考え方についての研究を深めた。平成30年度から「アクティブ・ラーニング研究推進モデル校事業」を受け、自分のものの見方・考え方に偏りはないかどうかを主体的・対話的な相互交流の中で自己省察できるように、授業や特別活動の内容を工夫しながら研究を進めてきた。

今年度も引き続き「アクティブ・ラーニング研究推進モデル校事業」を受け、2年間の実践を継続しながら、児童自身が多面的・多角的なものの見方・考え方を身に付けることで、より深い学びとなり、学びの質の高まりとともに望ましい自尊感情が育つのではないかと考え、研究を継続している。

II 研究主題等

研究主題 **学びの深まりが実感できる教育活動の創造Ⅲ**
- ものの見方・考え方を広げ、深める指導方法の工夫 -

◆研究主題設定の理由

(1) 今日の課題から

変化の激しい現代社会においては、身の回りに生じる様々な新しい課題に立ち向かい、その解決に向けて多様な他者と協働し、それぞれの状況において最適な解決方法を探り出していく力を持った人材が求められている。そのためには、

- ① 単なる知識理解ではなく、生きて働く知識・技能を身に付けること
- ② 未知の状況に柔軟に対応できる思考力や判断力を培うこと
- ③ 時代に流されるのではなく、進んでよりよい社会を創ろうとする学びに向かう力や人間性を涵養することが必要である。

平成29年度より本校では、何よりも自分自身で物事を正しく判断して実行する、よりよい社会の担い手となる力を身に付けることが重要だと考え、様々な状況を想定し、判断できるようになる「思考力の育成」を最優先事項とした。その研究の成果として、教科の枠にとらわれない思考スキルを活用することは、「ものの見方・

考え方」を広げることにつながった。

平成30年度は、引き続き思考スキルの定着を図ると同時に、それが客観的な「ものの見方・考え方」になっているかどうかを確認するため、アクティブ・ラーニングの視点（主体的で対話的な深い学び）を取り入れた学習指導の中で検証し、話し合いの中でメタ認知力を確かめ、育てていくようにした。

昨年度は「アクティブ・ラーニング研究推進モデル校事業」を受け、前年度の実践を継続しながら、児童の変容を捉えて分析し、望ましい自尊感情の育成に迫るとともに、そのための教師自身のものの見方・考え方を振り返ることに努め、より児童の意識や気持ちに寄り添える教師をめざした。

本年度は、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた学習指導の研究の3年次にあたり、より児童たちが主体的・対話的になるよう、授業研究や縦割り活動を積み上げていきたい。また、新型コロナウイルス感染症の影響により、まさに予想できない様々な状況に対応した思考力や判断力が求められている。溢れる情報から必要な情報を取捨選択し、友達と考えを交流し、よりよい生き方を模索していく力が必要とされている。

(2) 本校の研究の歩みから

本校では、平成27・28年度と自尊感情を育む研究を進めてきた。その背景には、家庭でよさを十分認めてもらえていなかった児童たちや、すぐに友達と自分を比較して自信を失う児童たちが大勢おり、正しい自尊感情が育っていなかったと分析したためである。2年間の継続実践で児童たちに「ありのままのあなたでいいんだよ」と各教員がメッセージを送り続けたことにより、児童たちは、「自分は先生方に受け入れられている」という基本的な自尊感情を育むことができた。

しかし、基本的な自尊感情は高まったが、もう一つの、自他を比較してお互いにそのよさを認め合う社会的な自尊感情を高めるまでにはいかなかった。その結果、他人には厳しいが、自分には甘いという正しいメタ認知ができない児童が増えてしまった。

そこで平成29年度は、県教委研究指定「思考力等の育成モデル校授業」を受け、思考力の育成をテーマに取り上げ、「ものの見方・考え方」を広げることによって、自分の判断力に客観性があるかどうか自己吟味できる児童の育成、つまり、自分だけの考え方に留まるのではなく、周りの友達はどういうふう考えているのか、またそう考える根拠は何かを推測できる児童を育てようとした。その方法として、授業の中で「認識の言葉（思考スキル）」を教え、多様なものの見方の方法を教師が気付かせ、習得できるようにした。さらに「ふれあい活動」では、自分と異なる意見に対して、その要因を判断基準の比重によるものだと推測し、話し合うことによってお互いの考え方を知り、よりよく問題を解決していこうとする児童の育成をめざした。

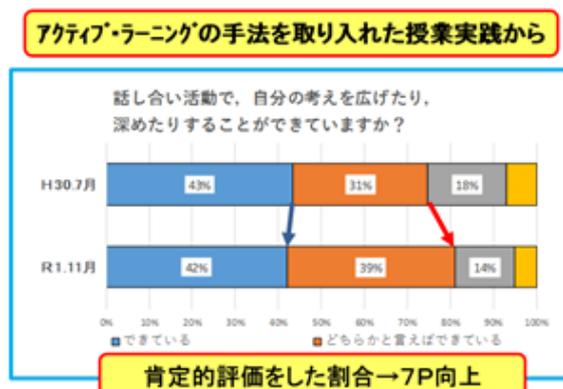
一昨年度・昨年度から、さらにそれを一歩進めて、自分の考え方・感じ方の視点を広げると同時に、自分の意見と異なる友達を認めることができるようになること、つまりアクティブ・ラーニングの視点に立って友達の考えを知ることにより、自分の学びをより深めることができるようにしたいと考えた。そうすることが、自他の存在を認め尊敬し合う、本来の正しい自尊感情の育成につながると考えたからである。

(3) 本校の実態から

① 主体的・対話的な深い学びの成果

ア 児童の質問紙の分析から推測できること

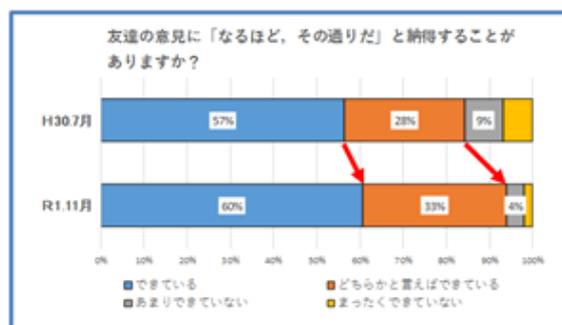
授業の中で、まず自らの考えをもつ「主体的な深い学び」の場を設定したこと、また、特別活動の中で、友達との「対話的学び」となる振り返りの場を確保したことにより、児童の意識が少しずつ変わってきた。『話し合い活動で、自分の考えを広げたり、深めたりすることができますか?』という質問に対して、「どちらかといえばできている」と回答した児童が増えている。



また、『友達の意見に「なるほど、そのとおりだ」と納得することがありますか?』という質問に対しても同様に、肯定的な評価をした児童が増えている。これらのことから、自分だけの考えで判断し行動することよりも、友達との意見交換をしてその情報を参考にしながら自分で考えて行動することに価値を見出す児童が増えてきていると推測できる。

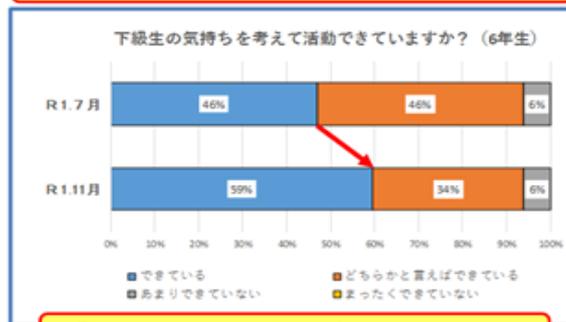
イ 相手意識を考える児童が育ってきている

話し合い活動の充実により、自分の意見と異なる友達を認めることができ、友達の考え方を取り入れ、さらに自分の意見を深めようとする姿が見られた。特に6年生においては、『下級生の気持ちを考えて行動できていますか?』という質問に対して、自信をもって「できている」と回答する児童の割合が大きく向上した。また、学校全体としても、『友達のいいところを見つけることができますか?』という質問に関して、「できている」と自信をもって回答した児童の割合が増加していることから、互いに認め合いながら成長しようとする社会的自尊感情が高まりつつある。



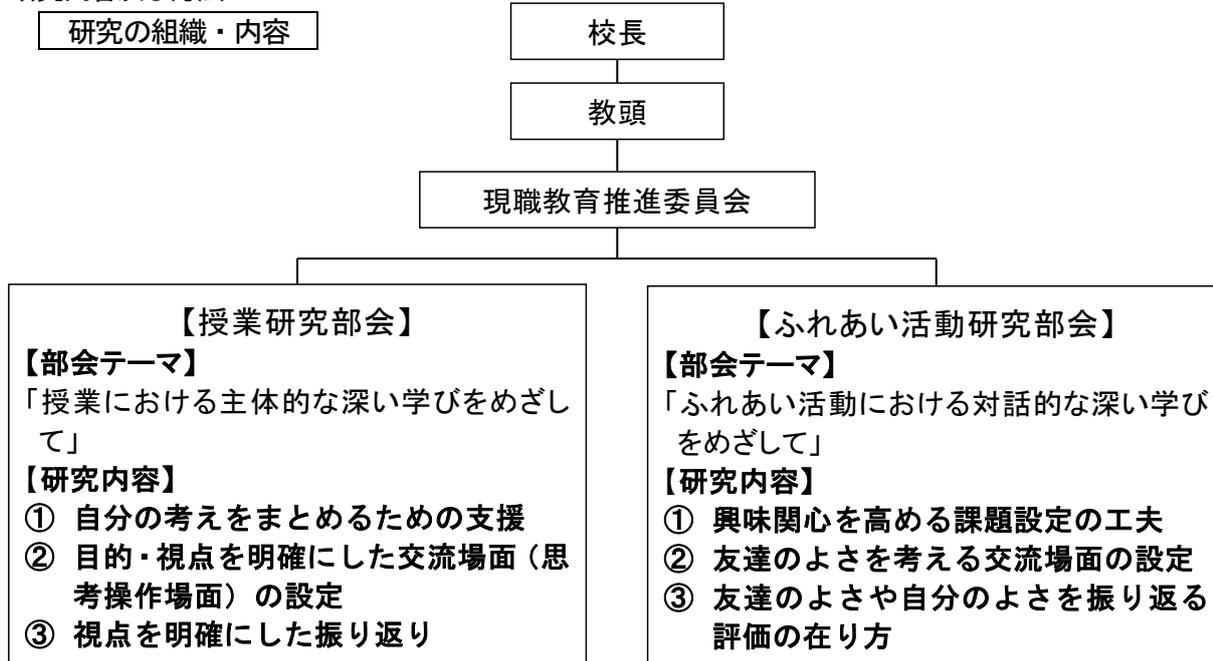
肯定的評価をした割合→8P向上

ふれあい活動における実践から



「できている」と回答した割合→13P向上

◆研究内容及び方法



研究仮説

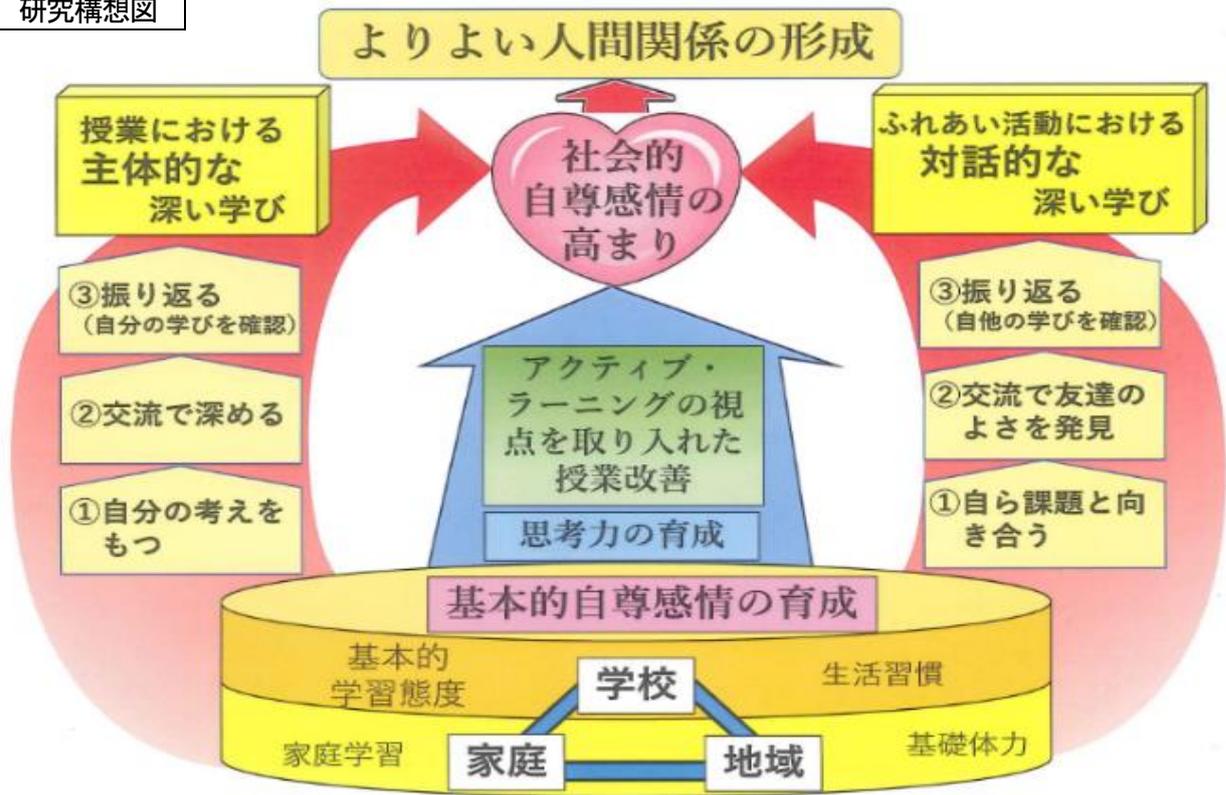
仮説①

友達との協働学習において、学んだ思考スキルを活かして、主体的に自分の考えを表現することにより、考えを広めたり、深めたりすることができるようになるのではないか。

仮説②

特別活動等における課題解決において、友達との対話的な話し合いを重ねることにより、自分の考えや友達の考えのよさを認め合い、よりよい解決策を考えることができるようになるのではないか。

研究構想図



III 研究実践

◆指標設定と結果

1 (教員質問紙) 児童の多様な考えを引き出したり, 思考を深めたりするような発問や助言等をしていますか。

指標 「①行っている+②どちらかといえば行っている」の合計



2 (児童質問紙) 友達と話し合うとき, 友達の話や意見を最後まで聞くことができますか。

指標 「①している」の合計



3 (児童質問紙) 分からない問題があるとき, 見方や考え方を変えながら, あきらめずに取り組んでいますか。

指標 「①取り組んでいる+②どちらかといえば取り組んでいる」の合計



◆達成に向けた取組

第4学年 算数「垂直・平行と四角形」の授業実践からの考察

主体的な深い学びにつなげるための支援

(1) 平行な辺に着目したなかま分け

授業支援アプリを使って、6つの四角形をなかま分けした。平行や辺の長さに着目できるように、既習の学習内容を掲示しておいた。なかま分けができない児童には、平行な辺の組を色分けした四角形をヒントカードとして渡し、平行に着目してなかま分けできるようにした。

(2) 視覚的に分かりやすくするための色分け

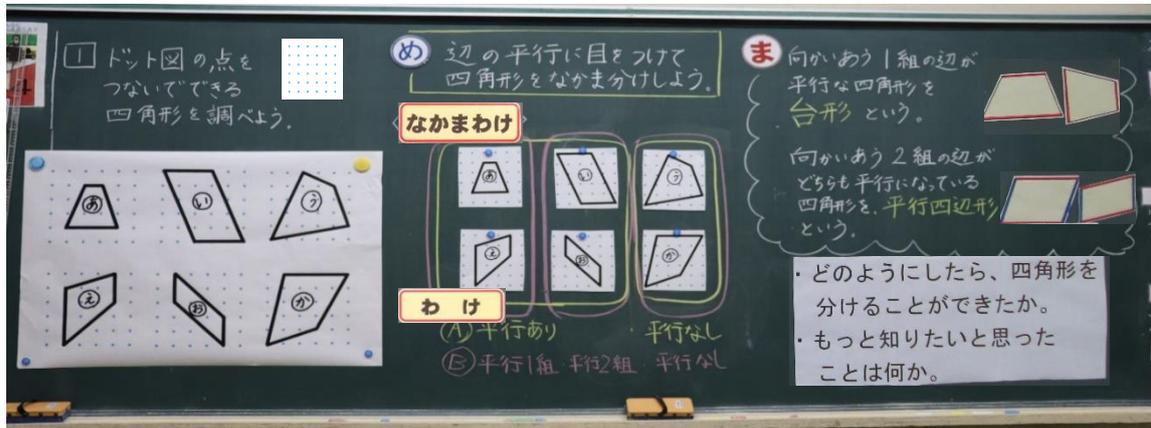
四角形を分類する活動において、平行な辺の組に色をつけるように助言した。分類ができた児童には、なかま分けの観点を記入し、自分の考えが整理できるようにした。その後、ペアでなかま分けの観点について話し合い、辺の平行に着目した四角形の特徴に気付くことができるようにした。

(3) 2つの例を取り上げた観点を焦点化

児童から出た分類の中から、平行な組の数に着目した2つの分け方をテレビに提示し、どのような観点でなかま分けしているかを話し合うことで、観点を焦点化した。

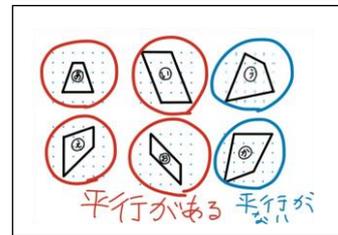
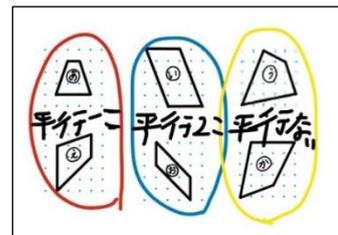
(4) 多面的に見るための四角形の提示方法

平行の数に着目することにより、平行四辺形と台形の定義へと導いた。平行は、上下、左右、斜めの位置関係でも成立することを、図形を回転させることで気付かせた。また、平行な辺の長さを極端に変えることで、台形は等脚台形や、そうでないものもあることなどを気付かせた。

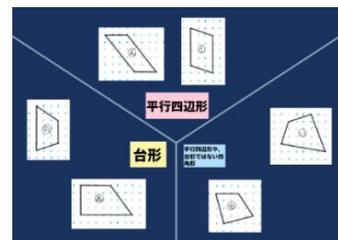


児童の反応

- 授業支援アプリを使ってなかま分けをする活動では、ペアに自分の考えを送り合い、友達のことを参考にしながら自分の考えを見直すことができていた。提出したシートでは、「平行な辺の組の数」に着目して3つに分類した児童が8名、「平行があるかないか」に注目して2つに分類した児童が5名、その他考え方で分類した児童が5名であった。つまりきとして「辺が垂直か平行になっている」という考えや、「辺を伸ばしたら交わる」「縦の平行と横の平行で分ける」という考え方が見られた。
- テレビ画面に、辺が極端に長い四角形や回転させた四角形を提示し、平行四辺形や台形であるかを問うと、ほとんどの児童が定義の言葉を用いて説明することができていた。見た目だけで判断しづらい四角形を、どのように弁別するべきか問うと、三角定規を辺に当てて確かめるとよいという意見が出され、平行な辺に着目した説明ができた。
- Yチャートで四角形を3つに弁別する活動では、18人中16人が正しく弁別することができた。授業支援アプリの操作も困ることなく使うことができていた。
- 四角形をなかま分けするために、平行な辺の組を見つける活動では、ほとんどの児童が三角定規を正しく用いてワークシートに記入できていた。



〈授業支援アプリのなかま分けシート〉



〈Yチャート〉

授業者の振り返り

本時では、授業支援アプリとワークシートを活用して取り組んだ。操作は十分できていたが、紙によるワークシートでの活動からタブレット端末による授業支援アプリでの活動へ移る際に、思考の流れが途切れてしまう児童がいた。本時の四角形のなかま分けをする場面では、平行な辺の組を見つけたワークシートを撮影し、それをアプリ上の学習シートとして活用することなど今後の工夫が考えられる。

第2学年 国語「ことばで絵をつたえよう」の授業実践からの考察

主体的な深い学びにつなげるための支援

(1) 順不同の3つの説明文を並び替える活動

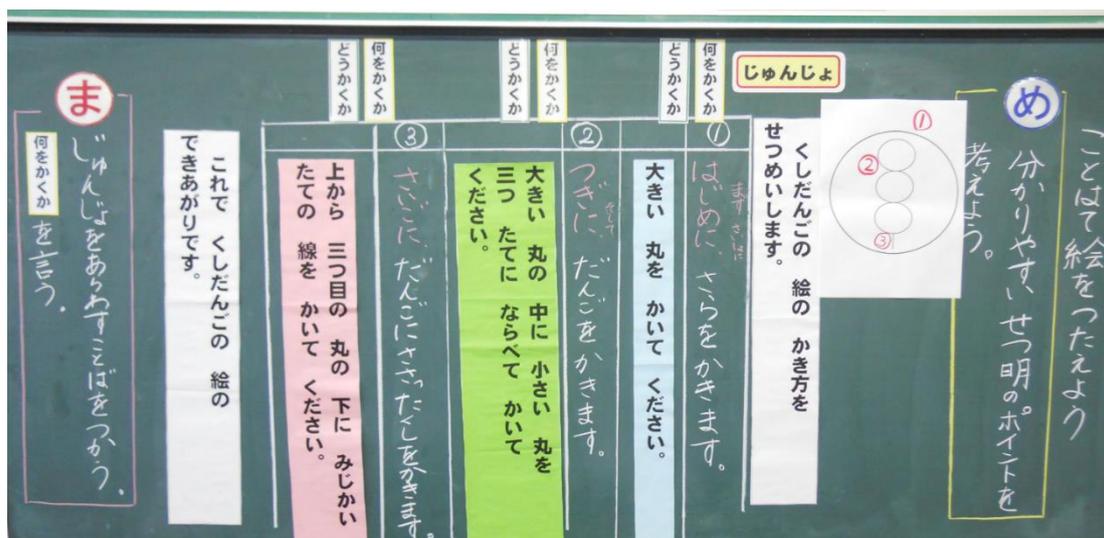
順序を考えて説明することの必要性に気付くようにするために、バラバラにした3つの文を正しい順番に並び替える課題を与えた。そして、順序を表す言葉を付け足し、分かりやすい説明にするためには、「中」で何をどう描くかを説明する必要があることに気付けるようにした。「はじめに」「つぎに」「さいごに」に何を描くか、もとの絵に番号を付けて説明の順序をはっきりさせたり、順序を表す言葉を赤色で書いたりして説明の順序を意識づけた。

(2) 順序に気をつけて説明を聞き合うペアでの交流活動

「中」で「何を描くか」について順番を決めて自分の説明文を書いた。その後、ペアでお互いの説明文を聞き合った。聞き手は、相手の説明を順序に気をつけて聞きながら説明された順番に絵をなぞっていくことで、互いに順序を意識しながら話したり、聞いたりできるようにした。

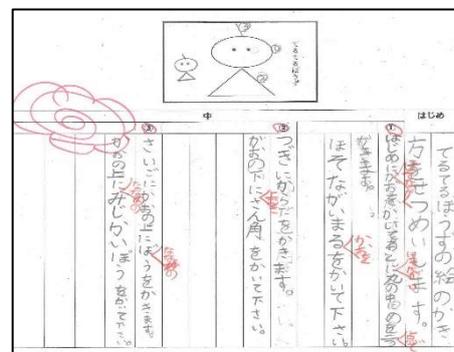
(3) 順序を意識して説明が聞けたか評価し合うシールの活用

ペアで説明を聞き合い、説明の順番に沿って絵がなぞれたかシールで評価し合うことで、順序に気をつけて聞いたり、相手に正しく説明が伝わったりしたことを実感できるようにした。



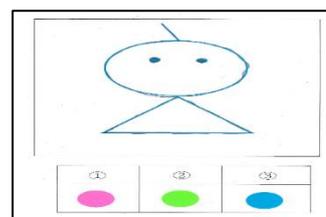
児童の反応

- ・ 順不同の3つの文の説明を聞き、実際にくしだんごの絵を描いたことで、順番を並び替える必要性に気付くことができた。
- ・ 一人一人が iPad を使って、3つの文の言葉に着目して読み動かしながら順番を考えることができた。その際、ペアで話し合う時間を取り、確認しながら進められた。全体で確認する際には、理由も説明させることで、前後の言葉をつないで順序を考えることができた。
- ・ 「はじめに」「つぎに」「さいごに」の言葉を見つけた後、手本の絵に番号をつけてどこの部分の説明か照らし合わせて考えることで、「何を描くか」の説明があると分かりやすいことを押さえた。
- ・ その後に「どう描くか」の詳しい説明が必要なことを児童に気付かせたかったが、違いを見つけることが難しかった。詳しい説明の文を除いて示したり、絵を描かせたりするなど分かりやすさを実感させる手立てが必要である。



〈説明を書いたワークシート〉

- ・ 自分の説明する絵にも順番を決めて番号をつけたことで、「はじめに」「つぎに」「さいごに」の言葉を使って「何を描くか」の文が書けた。数名の児童が「どう描くか」を書いていた。
- ・ できた文をペアで読み合い、順序に気をつけて聞いたことをシールを貼って評価し合った。順序に気をつけて説明したり、聞いたりできたことを確かめた。



(友達と交流した時の評価シート)

授業者の振り返り

児童たちは、実際に絵を書いたり、3つの文を比べて読んだりしたことで、順序を考えて説明する必要性を見つめることができた。しかし、「何を描くか」と「どう描くか」の2つのポイントの違いが分かりづらいようだった。児童の様子を見て、文の見せ方を工夫したり、絵を描かせたりするなど分かりやすさを実感する手立てを臨機応変に講じることが課題である。また、時間配分を意識し、考えさせたい部分と教師が押さえる部分を明確にして授業を進めていくことを意識していきたい。

◆特徴的な取組

「今できることは何か」を考えた今年度のふれあい活動

(1) 活動計画

本年度は、新型コロナウイルス感染症による大きな変更を余儀なくされている。また、大人数での活動を避けるため、全校生での縦割り班活動は実施できていない状態にある。そのため活動計画を変更し、部分的な交流活動を行っている。

時期	活動名 (☆は新企画)	活動の実際
6月中旬	1年生を迎える会 (1・6年)	6年生が1年生に対し、学校内を案内し、簡単なゲームをしたり、プレゼントを渡したりした。
7月上旬	☆あいさつ列車 (全校生希望者)	通常の玄関前での挨拶運動ではなく、全校の希望者が集まり、各教室を巡回しながら挨拶運動を行った。
7月上旬	プール開き (交流学年同士)	1年6年、2年と5年、3年と4年の交流学年同士でプール開きを行った。
7月下旬	☆学習ノート交流会 (6年と3年)	6年生の自主学习ノートを他学年の児童が参考にする場を設けて、学習面での交流を図った。
9月上旬	顔合わせ会	本年度最初の縦割り班活動となった。自己紹介やアイスブレイキングを行いながら交流を深めた。
10月中旬	運動会 縦割り班競技	例年の綱引きではなく、密にならない玉入れで工夫しながら競争遊戯を行った。

(2) 活動の実際

本来であれば、昨年度に引き続き、「計画・準備・実践・振り返り・改善実践」といった学びのPDCAサイクルを重視した縦割り班活動を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響で行事の削減・見直し・縮小が行われた。その中で児童は、「今できることは何か」を考え、できるだけ自分たちの力で行事を見直し、運営することを心がけた。

① 1年生を迎える会 (1年生と6年生)

計画

4月に全校生が参加して行っていた会を休業期間明けの6月になってから1年生と6年生のみで実施した。6年生には、最上級生であるという自覚と自分たちで運営するという意識をもたせたいと思い、実施前に行事の「中止」か「実施」を考えさせてから実施に至った。当初は、体育館での『学校クイズ』や『鬼ごっこ』といった意見が出ていたが、感染症予防のための大きな制約に気付くことができた。「1年生と6年生が密集しない」や「接触する人数と時間を減らす」などを守りながら1年生が喜んでくれるにはどうすればよいかを考えることが大きな議題となった。この制約を守るための議論を何度も行った。議論を深めるうちに「自分たちが盛り上げるだけでなく、1年生にも喜んで欲しいという視点を忘れてはいけない」といった発言もあり、6年生の他者意識の高まりが感じられた。

実践

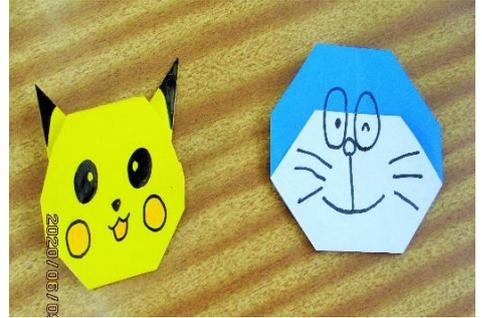
当日は、複数の教室で『宝探しゲーム』を行った。各教室の人数を10名程度にしぼり、10分以内で活動を終えることを意識した。宝を見つけた児童に折り紙と手紙をプレゼントし、歓迎のくす玉を割って終わりとなった。宝探しの最中は、「1年生ファースト」を心がけるようにし、干渉しすぎず、困っていれば声をかけるようにした。



〈図書室で宝探し〉



〈折り紙のプレゼント贈呈〉



〈心を込めて折った折り紙〉

振り返り

1年生の嬉しそうな表情やお礼から6年生も自信を深めたようだった。振り返りカードには「やってよかった。」や「次の活動では〇〇したい。」といった意欲的で前向きな言葉が多数聞かれた。

② プール開き（5年生と2年生）

計画

2年生と楽しく初泳ぎをするために学級会を開き、2年生が楽しめるゲームと役割分担について話し合った。「2年生は楽しめるかな。」と考えながら、「これは密になるから別のにしよう。」など、感染症予防をふまえた話し合いになり、『お宝探し』と『船長さんの命令』の2つのゲームに決まった。宝については、「折り紙で作ったお宝を2年生にプレゼントしようという。」という意見も出た。

実践

7月2日、例年より1か月遅れのプール開きだったが、高学年としての初仕事への期待と緊張が混じった中にも、はつらつとした声で交流会が始まった。一緒に遊んだり、裏方に徹したりと、自分の役割をしっかりと意識した活動できた。



〈計画・立案〉



〈司会・進行〉



〈2年生との交流場面〉



〈プレゼント贈呈〉

振り返り

自分たちも一緒にゲームに参加して遊ぶことで、2年生との心の距離も縮まり、今後の活動に意欲をもった感想が多く見られた。また、折り紙のお宝を渡す場面では、一緒に折り紙で遊ぶ場面も見られた。

IV 研究の成果と課題

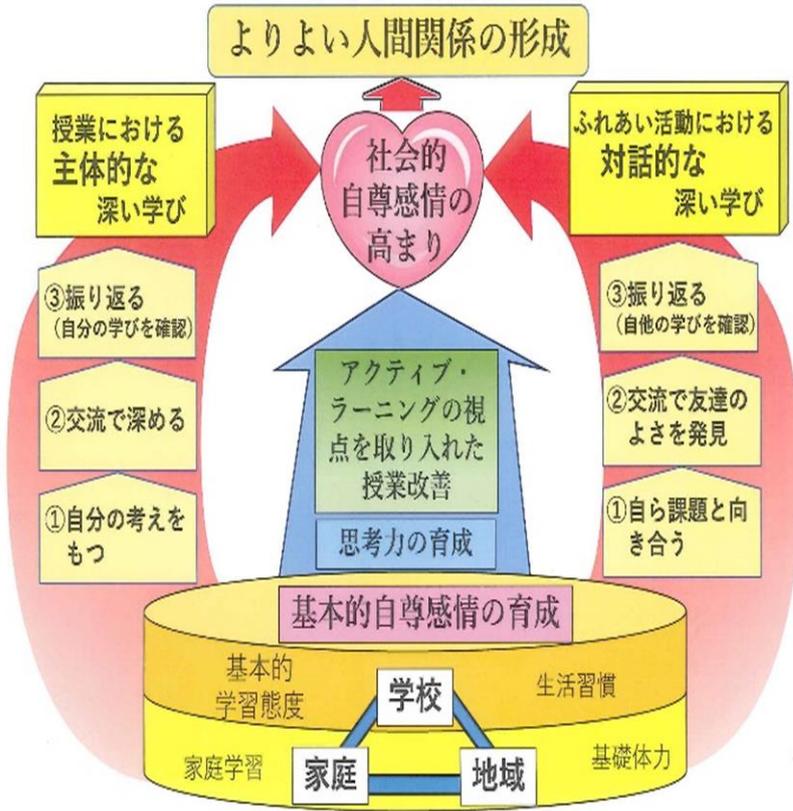
授業にあたっては、友達の考えを知り、自分の学びを深めるような授業展開になっているかということについて検討を重ねてきた。教師が真摯に授業づくりに取り組むことで、児童たちの学ぶ姿が変わってきたことは大きな成果である。教師がその授業のために費やした時間や、その授業にかける熱意は、きっと、児童たちに伝わっている。教師自らが学ぶ姿勢こそが、学びの深まりを実感できる教育活動につながっていると感じる。

ふれあい活動については、行事の時期やもち方などの工夫次第で満足感や達成感は十分に得られるということに気付いた児童も多くいる。児童の創意工夫によって、その状況に応じた最適解を模索していけるような手立てを講じられるようにしていきたい。

1 研究主題

学びの深まりが実感できる教育活動の創造Ⅲ
 —ものの見方・考え方を広げ、深める指導方法の工夫—

2 研究の具体



- 思考ツール等の活用方法を工夫し、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業改善を行う。
- 目的・視点を明らかにし、自分の考えと友達の考えを交流することで、互いに認め合い、学び合う習慣をつける。
- 視点を定めて振り返りを行い、学びの深まりが実感できるよう工夫する。
- ふれあい活動（朝活動・縦割り活動）では振り返りの充実と活用、改善を試みる。

思考ツール等の活用方法を工夫した授業

順序立てる	比較・分類する	関連づける	理由づける
<p>【2年国語 ことばで絵をつたえよう】</p> <p>聞く人に分かりやすく伝えるように順序を表す言葉を付け加えてみましょう。</p>	<p>【4年算数 垂直・平行と四角形】</p> <p>平行の数に着目すると四角形は3つに分けることができるね。</p>	<p>【5年国語 和の文化を受けつぐ】</p> <p>伝えたいことを考え、それに合った資料を選ぶことが大切だよ。</p>	<p>【3年道徳 正直な心 『まどガラスと魚』】</p> <p>自分ならどうする？なぜそうするのか理由も考えてください。</p>

3 成果と課題

- 話し合う場面を確保し、話し合うための視点や材料の与え方を工夫したことにより、より深い学びにつながった。
- 思考ツール等を研究したことにより、児童の変容を感じるとともに、授業者としての認識を改めることにつながった。
- 研究授業では一定の成果が出ているものの、日常の授業において常に思考ツール等を意識した授業ができているとは言えない。また、児童の実態、授業の内容にふさわしい思考ツール等かどうか吟味する必要がある。